

日文研

2011年3月

no.46

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

日文研 四十六号

二〇一一(平成二三)年三月三十一日発行

編集 瀧井 一博

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

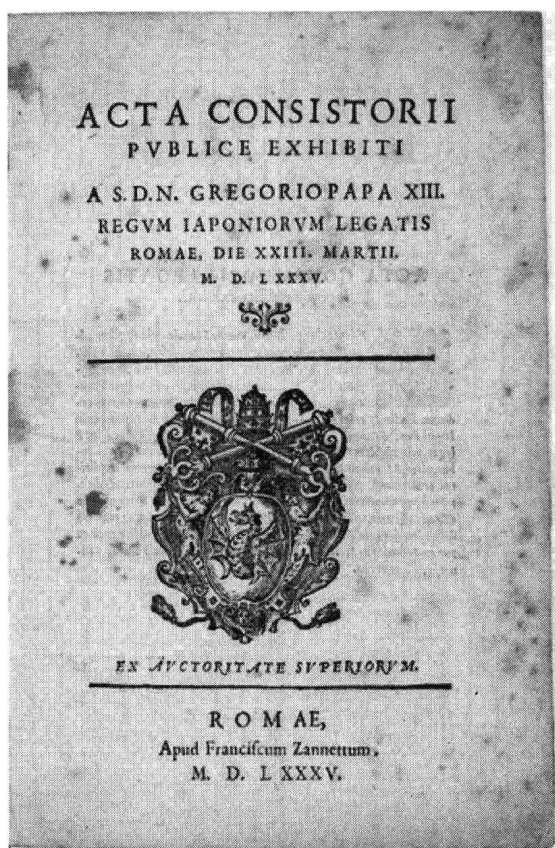
国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五—二二二二

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社



『枢機卿会公報』標題紙（ローマ、1585年刊）

1585年3月23日に行われた、天正遣欧使節によるローマ教皇グレゴリウス13世への謁見を記念し、その公式な記録として『枢機卿会公報』（“Acta Consistorii”）が同年に出版された。本書をきっかけに、天正遣欧使節について各国で数え切れないほどの出版物が出されたことによって、16世紀末、カトリック世界において本格的な日本ブームが起こった。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインズ准教授）

常州大学图书馆
藏 书 章

伊東貴之

「和漢」「和洋」「和漢洋」と「漢才」の行方

荒木 浩 ロングウェイのその先は 2

榎本 渉 幻想の外国医学 13

佐野真由子 「龍馬伝」イヤーの終わりに

吳 京煥 私と「日本」 24

—— 創作 ——

森 洋久

ビジョン・ネットワーク・サービス (続)

30

—— センター通信 ——

稲賀繁美 延辺調査備忘録 (下)

37

共同研究

44

基礎領域研究

60

彙報

62

所員活動一覽

72

—— エッセイ ——

エッセイ

ロングウェイのその先は

荒木 浩

一九八六年の一〇月に、名古屋の大学に就職した。一、二ヶ月程経ったある日、調査のために、久しぶりに出身大学の図書館を訪ねた。端末で活字本の所在を確認し、ふと横にある掲示板を見ると、図書の延滞者の名前が張り出してある。もう在籍していないのに、なんとなく眼が止まる。本の貸借には厳密なほうであったつもりだが、大学院時代は、それなりに多くの本を借りていた。引越しのまぎれなどに返し忘れがなかったか、ちょっと気になったのである。あにはからんや、貼り紙を見ると、私の名前で借り出された多くの本が列挙され——知らない本ばかりだが、学部も同じだ。間違えようがない——、要返却、とされている。

全く身に覚えがないことだった。そしてなにより自分の名前が大量に、他大学の図書館に張り出されていることが、さすがに恥ずかしく、血の気も引いた。あわてて受付に申し出て、借りている本などないはずですけれどと、照合してもらう。最初は疑わしそうにしていた司書の方も、カタカタとキーボードを打って画面をのぞくと、わずかにうなずいた。画面をこちらには見せないようにしながら、小さな声で、同姓同名の別人の方ですね。あなたじゃないの

でご安心下さい、というのであった。

一体に、私の姓名は平凡でありきたりだ、とよく言われる。けれども、その時まで、同じ名前の人に面と向かったことはなかったし、そのことでこれまで、特に困ったことはなかった。ところが、である。

一九九九年の秋、文部省在外研究の応募が通って、コロンビア大学に、二ヶ月程、短期滞在することになった。そのため、J-1ビザが必要で、旅行社を通じて申請した。充分な余裕を見ての手続きである。にもかかわらず、待てど暮らせど、一向に発行されない。さすがに渡航の時期が迫る。問い合わせしてみたところ、どうやら、私と同名で、しかも大学の学部まで同じの、とある人物がリストにひっかかっているために、チェックと称して、許可がストップしているらしい、との連絡である。悪い符合だ。あのときの、その人である。

日本にあるアメリカ大使館には、電話など直接の連絡が出来ないし、動きすぎないほうがよい、ということ、はらはらどきどき、待つことしかできない。大学の研究室主催の壮行コンパをキャンセルしたり、こちら側では次第に騒ぎになった。当時のやりとりの資料は全部取ってあって、「私の出発まで、もう一週間を切っています」などと訴えたファックス文面も残っている。どうしようもないので、場合によってはあきらめてください、と旅行社は言い、こっそり観光扱いで行ったら？などと、危ないアドバイスをなさる方もあった。大学側も、いざとなったら対応しますよ、と言ってくれたが、どこかでいろいろな流れがあって、いつかあつというまに、ばたばたと解決して、ビザが下りた。フライト数日前のことである。

その頃は、法人化前のこととて、書類の手続きも、細かいところまでうるさかった。たとえば、最初大学に出した申請書には、関空発と書いた旅程表を提出したが、採用され、実際にチ

ケットを取る段階で、伊丹↓成田↓ニューヨークというチケットが便利だということで、それをとった。すると、申請書類と違うから文部省の了承がいる。もう間に合わないの、チケットのほうを変更するように、と事務から言われたり。しかし、文部省在外研究というしじりが、最後にはブッシュしてくれて、ビザも下りたのだとすれば、いずれ諸刃の刃かな……。チケットをキャンセルして替えたために、ANAからノースウェストに変わった飛行機の中で、体を座席に押し込み、荒くれた？アテンダントのサービスを受けながら、しみじみあれこれ考えたものである。

キーン・セクターというところで講演をしたら、ふらふらしたおじさんがレセプションで近づいてきて、東京電力の社長の講演かと思ってきたよ、という冗談を言いかけてきた。怪訝な顔をしていたら、あの人は、いつもこういうレセプション狙いでやって来る、何日も風呂に入っていないような怪しい人なんですよ。となりになっていた学生が、そう耳打ちしてくれた。そうか、私の名前は、むしろそっちの方で有名なのだったと思い出した。社長さんには、ビザの苦労はなかっただろう。

マクドナルドで、add bacon? がとっさに聞き取れず、パネル二番のハンバーガーをもらおうとしたら、二個ですか? といわれたりして、とまどう私に呆れ顔のアルバイトのしぐさを見て、根本的に? 落ち込んだりしつつも (マクドナルドで、いい年をした大人の英語未習熟者が陥る困惑というのは、結構いろいろな人が書いているようだ)、優秀な大学院生たちがいろいろサポートしてくれて、滞在中、困ったことは全くなかった。大学とはブロードウェイをはさんで、westend というバブがある。院生と誘い合っては、夕刻のハッピーアワーに騒々しくビールのジョッキをあおった。彼等の何人かは、いま北米で活躍している研究者である。

国文学 (vernacular literature と訳される意味での) などをやっていたから、とかく視野は限定される。留学生ときちんと向き合うためには、彼等が学んだその場所で、その空気を吸って、一緒に学んでみることに。そうしてはじめてわかることがある、というか、そうしないといけないことがある。そんなごく当たり前のことを実感したのも、遅まきながら、あの時覚えたサミュエル・アダムズのおかげである。

少し街になれた一〇月、地下鉄の乗り換えで、タイムズスクエアの地下道を歩いていた。角を曲がると、人の波にのまれて押し出され、思わず大きなおにいさんにぶつかりそうになった。すると上の方から、オラクルのように、「You are walking the wrong side!」と低い声で叱られた。じゃまだよ、こら、などと、喚体（山田孝雄の文法用語である）で罵倒するのではなく、述体（同上）できちんと叱責するものだな、などと妙に感心しつつ、なんだか冷水を浴びたように、心にしてみた。すぐ調子に乗りやすい私には、いい教訓だ。

このニューヨーク滞在以来、積極的に、話があれば（些少であるが）、外へ出て行くことにした。何となくあやしげな度胸もついた。時々聞こえる「You are walking the wrong side!」という啓示?には、心は揺れても耳を貸さない。伊吹山から大江山へ、もとい、待兼山から大枝山へ。そして桂坂に着地して、下界を眺めてもみるのである。

おとし、ある先生から、タイのチェンマイ大学でレクチャーをしてほしい、という話があった時も、だから、二つ返事で引き受けた。タイからの留学生の指導は何人か担当していたが、それまでは、トランジットでバンコクの空港をうろうろしたぐらいで、タイに滞在したことがなかった。その空港は、当時出来たてで、とても美しく、印象抜群だったのである。

楽しみにしていたのだが、チェンマイの話は、残念ながら諸般の事情で流れてしまった。そ

の代わりに、二〇〇九年秋、バンコクで開かれた *ojsat* (Old Japan Students' Association, Thailand) の東芝国際交流財団助成金日本語教育セミナーに参加する話が、慌ただしく決まった。これにもすぐ、行きます、と答えた。心は、縁に引かれて移る(『徒然草』)。

最初にきた話では、バンコクトランジットでチェンマイに向かう、ということだったから、知り合いもない。何か情報を、と探していたら、『プール』という映画が、チェンマイを舞台に撮影され、公開されるとテレビが伝えていた(『ボクらの時代』)。「かもめ食堂」、『めがね』と続く一連のその映画の制作には、チューラーロンコーン大学出身で、大阪大学に留学していた、マッタナー・チャトウラセンバイロートさん(近代日本文学研究)が協力している。ということ、バンコクに行ってから、彼女に直接聞いて驚いたものである。映画はその後に観た。

今年度も、一〇月に、日文研・総研大の企画を兼ねて、バンコクに行った。例の騒動の傷跡はあったが、伊勢丹も活気に満ちて営業していた。夜、バンコクにいた友人たちと一緒に、TANIYA という歓楽街をフィールドしたことも、いい思い出である。チューラー大で最後の仕事が終わってから、先生方と昼食をとにした。女性四人、男性は私を入れて二人。美味しい料理に舌鼓を打ちながら、とある先生が、荒木先生、今日は、タイの美味しい料理を、多くの女性に囲まれて食べて、どういう気分、とお聞きになった。先生、昨今の日本では、それはとても口に出せない内容を含むようです、と申し上げると、どうしてですか、信じられない、とおっしゃっていた。タイと日本の時差は二時間だが、時差があるだけの距離と位置取りは、常にそれなりの価値観の齟齬を含んでいるものである。

二年続けての訪問で、すっかりタイが好きになってしまった。学会の二次会で、日本人研究

者たちと、蟹のカレーなどつつきながら、外国と言ってもいろいろですけれど、いつでもおり調子に乗って、それぞれの在体験などを話し合っていたら、ある研究者から、荒木さんは、勘違いややせ我慢をして、しなくてもいい苦勞をしている人なのかもね、と言われてしまった。至言である。そうかも知れない。「You are walking the wrong side!」。たとえば、今回も…、と書こうかと思ったが、紙数が尽きたので割愛する。楽しさと相半ばして、今回も、日文研所蔵の孫悟空の版画（『画本西遊記百鬼夜行ノ圖』玉園戯画、一般公開で展示）のように、大きな釈迦の手の周りで、ロング？サイドをくるくるまわるばかりの自分を思わず連想し、身につまされることは、少なくなかった、とだけ述べておこう。微笑みとともに、タイはブッダの国でもあることだし。

（国際日本文化研究センター教授）

「和漢」「和洋」「和漢洋」と「漢才」の行方

伊 東 貴 之

日本人の世界認識を考える際に、最も古く遡り得る代表的なものとして、古代以来のいわゆる「三国世界観」が挙げられよう。これは周知のように、「天竺」と「唐土」、並びに「日本（本朝）」の三者から構成されるもので、基本的には、仏教的な世界観と言って良いであろう。

もつとも、このうち、「天竺」に關しての表象は、概ね想像上の産物と言うほかないし、日本仏教の原型やフォーマットは、やはり殆どが中国仏教に起源するものと見做し得るので、実際のところ、些か空想的な世界観と評しても、強ち過言ではあるまい。加えて、ある意味では、いわば「唐土」の連続として、朝鮮半島がややネグレクトされるような、後世にも続く傾向をも孕んでいた（末木文美士「書評 横内裕人著『日本中世の仏教と東アジア』」、『史学雑誌』第百一七卷・一二号、二〇〇八年・二月号）。しかるに、平安時代などにあつては、かなり鞏固な枠組みとして機能していたことは確かで、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの構成も、勿論、これを踏まえるし、明治期の文化的なアジア主義を唱導した岡倉天心の有名な「アジアは一つ」（『東洋の理想』）といった言説にも、それは遙かに反響している。

これに対して、福沢諭吉が「脱亜論」において、「義絶」すべき「旧い友人」に準えたのは、当時はまだ清朝であつた「中国」と「朝鮮」であり、仏教の伝統や精神性によって、「インド」「中国」と「日本」とが、欧米の文化・文明に伍して、協調や連帯をなし得ることを希求した岡倉天心とは、そもそも「アジア」なり「東洋」の範囲が、大きく異なっている。もつとも、同時代的には、「三国世界観」の残響を感じさせる天心の理解よりも、「アジア」「東洋」の枠組みを「中国」「朝鮮」「日本」の東アジアの三カ国に限定する福沢の感覚の方が、一般的な知識人にとっては、馴染み易かつたのではあるまいか。泰平の世が続いた徳川時代において、オランダや琉球・蝦夷を除けば、交易や交際をする「異国」とは、専ら「中国（清）」と「朝鮮」であつたことを思えば、それはむしろ、自然な成り行きと言うものだろう。

翻つて、中国と日本、すなわち「和漢」を対比、ないしは並立させる発想もまた、一一世紀初頭の『和漢朗詠集』の事例が示すように、かなり夙い時期から存在する。それに比べれば、

日本人がイエズス会宣教師らの「西洋」人に接触するのは、ずっと遅れて、一六世紀半ばのことである。初めは「南蛮」人、次いで、「紅毛」人がこれに随う訳だが、前述の「三国」、換言すれば、アジアないしは東洋に、「南蛮」＋「紅毛」、すなわち「西洋」、あるいは、その延長としての「欧米」を加えたものが、当面する現実の利害関心にも直結し、知的にも実質的に認識し得る「世界」のほぼ全てである、といった状況は、近代以降も無論のこと、やや大袈裟に言えば、善かれ悪しかれ、大枠では現代にも引き継がれた、多くの日本人にとっての世界認識の限界とも言えるかも知れない。川田順造氏の提唱された「比較」のための「三角測量」といったことが、なお意義を有する所以である（『西の風・南の風』など）。

伝統的な「和魂漢才」という語彙をもじった、「和魂洋才」といった表現が、具体的に何時頃から用いられたかについては、諸説あるようだが、何れにせよ明治以降であることは、もとより言うまでもない。有名な佐久間象山の「東洋道德、西洋藝術」もまた、含意するところは、朱子学を中心とした儒教道德と西洋の科学技術や軍事技術との併存を説くものであるから、実質的には、いわば「漢魂洋才」といったところであろう。鵬外や漱石、中江兆民や河上肇といった系譜に属する人びともまた、「和」文脈への造詣もさることながら、気分的には、「漢／洋」に些か比重があるやに窺われる。これが、荷風散人や夷斎先生こと石川淳、それに戦後では、中村真一郎あたりになると、教養の質ばかりでなく、気分的にも「和漢洋」と呼んでも良さそうな感触がある。

それはともあれ、お隣の中国で、清末の洋務運動のスローガンとなった「中体西用」なら、中華文明の歴史的な厚みに鑑みれば、宜なる哉、といった部分もあるのだが、「漢」や「洋」、更には「漢／洋」に「和」が比肩するかのような考え方それ自体は、自国文化への愛着がなせ

る技とは申せ、料理やグルメの世界ならともかく、些か誇大妄想的な色合いも拭い難い。

ところで、ここでアカデミズムや藝術の世界に眼を転ずるなら、やはり明治期以降、圧倒的な西洋化・欧米化の一方で、なお「日本」と「西洋」は、まだしも対になり得る余地が残されていた。「日本画」と「洋画」、大学の講義科目なら、「西洋経済史」に「日本経済史」（政治史・法制史等）といった具合である。それに反して、「漢才」の部分が占める割合は、順に減退していると言わざるを得ない。このことは、たんに「外国」としての「中国」や「東アジア」への興味関心の低減といった事柄に止まらず、日本の伝統文化の重要な要素の忘却とさえ言い得る事態であろう。私たちが日展やら院展やらで眼にする「日本画」とて、琳派などの影響もあろうが、伝統的な大和絵や中国画とは似て非なるものであり、「洋画」に対抗して成立した、ある意味では至ってモダンな試みや現象でもあるそうだが（佐藤道信『日本美術の誕生』など）、ある種の普遍性を揚言する「哲学」をはじめ、そもそも「漢」はおろか「和」の入る余地さえ、狭小なジャンルとして存在しているのだ。例えば、クラシックからJ・ポップまで、数多の作曲家やミュージシャンを愛好している向きでも、東儀秀樹氏よりほかに、「邦楽」演奏家の名前を挙げられる人は、そう多くはあるまい。

以下、少しく以前に草した旧稿だが、現在もなお、当時と全くと言って良いほど、事態もさほど変化せず、筆者自身の思いも依然、変わらないので、煩を厭わず、引証させて頂くことにする。

——なぜ「政治学史」という授業では、プラトンに始まって、もっぱら「西洋」の思想家のみ扱うのか。これを「西洋政治思想史」と言い換えたときには、何らかの自己限定的な意味合いがあるのか、無いのか。：（中略）：：すぐにも氣づかれるように「哲学」や「音

楽「美術」などにおいても、奇しくも事態は同じである。ことは、近代西洋のグローバル化のみならず、明治期以降の日本のアカデミズムや学校制度の枠組の問題でもある。(中略)：プラトンやロック、ルソーが世界の共有財産であり、その意味で「我々の」ものでもあることは、モーツァルトやベートーヴェン、ダヴィンチやピカソがそうであるように、もはや自明であり、言うまでもないことだ。しかるに、朱熹(朱子)や荻生徂徠は、どうしてそうはならないのか。彼らが劣っているのか、悪いのは世間(世界)の方なのか。：(中略)：一般の読書界や知識人の話題や脳裡に、古典的な中国趣味や現代中国の政治・経済への関心が入る隙はあっても、同時代的な「哲学」「思想」上の営為を支えるものとしては、伝統中国の遺産は今日、常に埒外に置かれたままだ。(『藤原保信著作集』月報No.1(同・第一〇巻、新評論、二〇〇五年、所収)。

だが、たとえば、専門家ではない日本の多くの普通の知識人・読書人が、デカルトなりカントなりについては、漠然とではあれ、それなりのイメージを有しているであろうことに反し、「東洋のルソー」と称された黄宗羲なり、朱子学の体系をいわば内在的に脱構築した戴震なりについて、何がしかの知識を持ち合わせているとは、到底、考え難い。更には、学術研究においても、たとえば、朱子学の理気論なり心性論なりを、アリストテレスやスコラ哲学の教説に比擬し、また、西欧の市民社会論や「公共性」論を援用して、中国社会を分析することはあっても、その逆は到底、存在し得ない。世界の実勢に鑑みても、そうした不均衡は、やはり問題だろう。

敢えて誤解を虞れずに言えば、筆者は、個人的には、そうした「知」の不均衡をいさかでも解消することを自らの本分と考えている。それは、決して「アジア」主義的な心情

に発するものではないが、やや大袈裟に言うなら、我々の身边に遍在する、西欧中心主義やアメリカ流のグローバリズムを一定程度、相対化し、全体のバランスを恢復・微修正すべく、個別・具体的な状況に風穴を開ける、ミクロ・ポリティクスの実践に他ならない。そして、多くの人びとによるそうした実践の累積の上に、やがて「アジア」から「世界」へと向けて、人類的な「普遍」性を見えた〈知〉が発信されることを、何よりも希求するものである（『他者』の来歴、『現象』としての中国―状況論的、文脈的、そして、原理的に、『現代思想』vol.284、二〇〇一年三月号）。

繰り返すが、筆者は何も、現代日本において、再び闇雲に「漢才」の比重を高めよ、と主張している訳ではない。「世界」全体のバランスというところで言うなら、無論、「別にアジアを語ることで正しい立場が保証されるというわけでは」ない（孫歌『アジアを語ることのジレンマ』）。ヨーロッパの精神世界が、ギリシア・ローマの古典古代の文化とユダヤ・キリスト教的な要素とを二つの大きな柱とし、滋養としているように、「漢」文化の要素は、古来、「和」の裡に、広く深く浸潤している。それを蔑ろにすることは、自らの遺伝子や精神の古層に刻まれた必要な部分を欠落させ、忘却することでもあるのだ。

浅学非才の身で、筆者自身の営みなど、大勢に対しては、最早、無駄な抵抗かも知れない。だが、これからも、自分の成し得ることを行い、たんに自らの畑を耕し、掘り進んでいくだけである。些か大仰な決意表明めくが、卑下でもなく、不遜でもない、これが正直な感懐の心算である。

幻想の外国医学

榎 本 渉

私が少し前に読んだ本に、池内敏氏の『薩摩藩士朝鮮漂流日記』（講談社選書メチエ、二〇〇九年）がある。一八一九年に朝鮮に漂着した薩摩藩士が朝鮮でどのように扱われたのかを、史料に即して検証したもので、対馬・釜山間で行なわれた公式の交流とは異なる、臨時的な日朝交流の様子を具体的に明らかにしている。その中に面白いエピソードがあった。薩摩藩士が船で釜山に護送される過程で停泊した古群山で、地方官が病気の幼児を連れてきて治療法を聞いてきたのである。藩士はこれに、川鰻に人参の粉末を加え醤油で味を付けたものを食べれば効くはずだと、自らが知っていた民間療法を教えた。その後には別の朝鮮人が来て、脳膜炎に苦しむ九歳児に効く薬を聞きたいという（一五〇～五一頁）。

彼らはなぜ医者でもない薩摩藩士に病気の診察を望んだのだろうか。二人目は地方官がそれらしいことを聞いて退去したのを見て、自分もお願いしてみようと思ったのかもしれない。だが一人目の地方官は、薩摩藩士の素性を知っていたはずである。地元の医者では治せないの、誰でもいいから一か八か聞いてみようという考えだったのかもしれないが、それでも明らかに医者でもない人物に医療を期待できると思ったこと自体、なかなか興味がかかることである。一定以上の身分の日本人ならば、自分たちにはない医学知識を持っているかもしれないという、まったく根拠のない思い込みがあったのだろうか。

言うまでもなくこのエピソードは、一九世紀の朝鮮より日本の方が医学の面で優れていたことを示すものではない。満足な医療を受けられない人々の、外の世界（それは必ずしも異国でなくとも、国内の別の地域でも良い）に対する期待感の現れと見るべきと思う。古くは一一世紀後半、高麗の文宗が病氣にかかり、宋や日本に医師の派遣を求めたことがあった。戦前にはこれを以って、平安時代日本の医学は高麗よりも進んでいたなどと言われたこともあるが、文宗のこの行動は必ずしも医学水準の客観的分析によったものではなく（そんなことは不可能である）、もしかしたら自国で治せない病氣を治せる未知の医学が外国にあるかもしれないという、ワラをもつかむはかない期待によるものに過ぎなかったのだろう。おそらく薩摩藩士に診察を頼んだ朝鮮人と同じことと思う。

外界に対して根拠のない期待感を持っていたのは、日本人も同様だった。つまり優れているから外国由来の医学を求めるといふより、外国由来の医学は優れているはずだという思い込みが、外国由来の医学に対する需要を生んだし、だからこそ外国由来という触れ込みは、しばしば強調されたのである。

たとえば江戸時代に有名だった錦袋田という氣付け薬がある。黄檗僧（おうはくそう）了翁道寛が調合し、一族の者が上野池之端の勸学屋で販売したもので、了翁自ら語るところによれば、その調合法は一六六四年、了翁が夢の中で黙子如定（もくじょにょじょう）という僧から授けられたものだという（『了翁祖休禪師行業記』、科学研究費補助金研究成果報告書『東京大学総合図書館所蔵嘉興大蔵経目録と研究』Ⅱに翻刻）。黙子は一六三二年に明から来日して長崎興福寺二世となった渡来僧であり、彼から授かった調合法は中国系のものということになっていたはずである。

了翁は道者超元・隠元隆琦・即非如（そくひにょ）など著名な渡来僧に師事して黄檗宗に投じた人物だ